

以上、本書に収録された論文のうちわずか2編にふれたにすぎないが、本書に何か統一的な視点を見出すことは不可能である。しかし、そのことがかえって、ディオニュシオス文書の影響の大きさと多様さを示すと共に、そこから生ずる様々な問題に目を向けさせてくれると言えよう。

Dimitri Gutas :

Greek Thought, Arabic Culture

*The Graeco-Arabic Translation Movement in Baghdad and
Early 'Abbāsīd Society (2nd-4th / 8th-10th centuries)*

Routledge, 1998, pp.xvii+230

仁子寿晴

現在イエール大学で教鞭を執る著者は *A Greek and Arabic Lexicon* の編者 (G. Endress との共編) を務めるなど、19世紀末のドイツに端を発するギリシア-アラブ研究の分野における現時点での代表的研究者の一人である。文献学という堅実な領域を活動の拠点としながら常に研究動向を左右するような刺激的な研究を発表し続けていることにグタスの特徴がある。例えば、今や Ibn Sinā 研究の基本文献に数えられる二作目の *Avicenna and the Aristotelian Tradition: Introduction to Reading Avicenna's Philosophical Works* (Leiden: Brill, 1988) では、H. Corbin らを中心とし、当時主流となっていた Ibn Sinā をアリストテレスの伝統とは異なる Oriental Philosophy (神秘主義的哲学といいかえてもよい) の観点から読み解こうとする試みを廃し、Ibn Sinā の思想の中には H. Corbin らが考えるような Oriental Philosophy は存在しないことを立証してみせた。

刊本としては三作目となる *Greek Thought, Arabic Culture* はペーパーバックでしか出版されておらず、一見、一般教養書の体裁をとっているが、内容的には、イスラーム世界における科学と哲学を研究する上での重大な示唆が含まれ、肯定するにせよ、否定するにせよ、今後の研究の出発点となることは間違いない。

アッバース朝期前半バグダードで、ある場合にはシリア語を介して、ギリシア語文

献が大量にアラビア語に翻訳され、それらの翻訳文献がイスラーム圏の思想に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。副題が示すようにこの書はまさにこの翻訳活動を主題とする。しかし従来の研究が、いつ、誰が、何を翻訳したのか、という問題に集中していたのに対して、「なぜ」翻訳活動が行われたのかの解明をグタスはこの書の目的とする。グタスはこの点に関して、A.I. Sabra, "The Appropriation and Subsequent Naturalization of Greek Science in Medieval Islam: A Preliminary Statement," *History of Science* 25 (1987) pp.223-243 の問題意識を共有している。ギリシア語文献のアラビア語訳はのちにラテン語に訳されること、さらに現在までのイスラーム世界には西洋に見られるような科学文明が独自に発達しなかったことを併せて考えると翻訳文献はイスラーム世界を素通りしていったとの見方にもつながりかねない。しかしこのようにネガティブにイスラーム世界を捉えるだけで十分なのか、少なくとも翻訳活動が成立するためにはイスラーム世界からの働きかけが必要条件としてあるのではないか、という問題意識である。このことはイスラーム（宗教としてであれ、そうでないであれ）というものをいかに捉えるかという問題につながる。両者に共通しているのは本質主義的に理解される「イスラーム」概念およびそれに伴うアナクロニズムへの疑義である。ただしグタスは Sabra とは若干ずれる側面を持っているが、それに関しては後述する。

翻訳活動は、一般的に語られるように、Ḥunayn ibn Ishāq に代表される少数のシリア語を話すキリスト教徒だけに依存していたわけでもなく、また Ma'mūn などの少数の啓蒙的君主に依存していたわけでもなく、実際には初期アッバース朝君主（グタスは特に第2代カリフ Maṣūūr, 第3代カリフ Mahdī, 第7代カリフ Ma'mūn の三人を取り上げる）の政治的イデオロギーを頂点に形成されたバグダード社会全体の産物であったという主張がこの書全体の中心である。この政治的イデオロギーの分析が第1部を形成し、「なぜ」翻訳活動が行われたかのマクロな視点からの回答になっている。翻訳活動が成立するにはまず750年に起こったウマイヤ朝からアッバース朝への政権の移動、さらにそれに伴うダマスカスからバグダードへの首都の移動が重要な意味をもつ。ギリシア語を話すアラブ人キリスト教徒（ギリシア正教徒）の影響が支配的なダマスカスでは翻訳活動は期待しえなかったからである。さらにカリフ Maṣūūr のイデオロギーの選択が決定的に翻訳活動に影響を与えた。Maṣūūr が採用したのは、ギリシア語文献を含む古代の著作（これらはアレクサンダー大王の支配に

よって様々な言語に分散してしまったと考えられている) をバフラヴィー語に翻訳することによってもともとゾロアスター教に含まれていた知を再発見しようとするササン朝の帝国を挙げての政治的イデオロギーであった。次の Manṣūr の時代はササン朝の末裔であるマニ教徒(二元論者)との論争のためのアリストテレスの『トピカ』『自然学』の翻訳によって特徴付けられ、Ma'mūn はギリシアの学問伝統を継承しないビザンツ帝国に対してイスラームの優位性を確保するためにギリシア語文献の翻訳を奨励した。つまり Manṣūr が設定した政治的イデオロギーが翻訳という事業と絡み合いながら、イスラームに収斂していく様が描かれているのである。ウマイヤ朝がアラブ帝国といわれるのに対してアッバース朝がイスラーム帝国といわれる所以でもある。

第一部で興味を引かれるのは「知恵の館 Bayt al-ḥikma」に関する議論である。従来「知恵の館」は Ma'mūn が設立した翻訳センターとされ、バグダードの翻訳活動を語る際の象徴とされてきたが、グタスはそのことを示す証拠とされてきた文献を再検討することで、「知恵の館」はササン朝の伝統を受け継ぐ君主の個人図書館にすぎず、翻訳活動全体からみてそれほど大きな意味を持っていないことを指摘する(minimalist interpretation)。このことは翻訳活動が一事象、もしくは一人物に還元されるものではなく、社会全体をその基盤として考えるべきだという主張につながっている。

第2部の5章と6章は、「なぜ」翻訳活動が行われたかの回答は君主の政治的イデオロギーだけにとどまらないことが示される。政治的イデオロギーだけでは2世紀半にも及ぶ翻訳活動の活動期間の長さが説明されないからである。ここでは二つの側面が指摘される。バグダード社会における学問的営為の自律性(5章)および翻訳活動を経済的に支える層の厚さ(6章)である。前者は翻訳活動がイスラーム世界の学問的営為を作りだしたのではなく、学問的営為こそが翻訳活動を促進したという形で提示される。これに関しては数学・医学・哲学の例で説明されている。グタスは挙げていないが哲学については F. W. Zimmermann, "The Origins of the So-Called Theology of Aristotle," in *Pseudo-Aristotle in the Middle Ages: The Theology and Other Texts*. eds. J. Kraye, W. F. Ryan and C. B. Schmitt (London: Warburg Institute, University of London, 1986), pp.110-240 が Kindī サークルを同様に解釈している。後者についてはカリフに限らず、廷臣・書記・学者さらには翻訳者までもが翻訳

活動の後援者であったことが示されている。つまりは翻訳活動とはバグダード社会が生み出し、しかもそれをバグダード社会が維持していくシステムがあったということが指摘されているのである。

しかしバグダード社会全体が翻訳活動を支えていたという主張をした場合に最も大きな反論が予想されるのは、「正統派」イスラーム (Islamic Orthodoxy) の存在に関してである。7章がこの問題も含めた翻訳活動の反対勢力の分析にあてられる。外来の学問、ギリシアの学問を敵対視する「正統派」イスラームという概念は研究者の間にも根強くあるのでグタスはまず、少なくとも8世紀後半から10世紀までの翻訳活動の期間には多数派イデオロギーとしての「正統派」イスラームはなく、もし何らかの意味で「正統派」イスラームと呼べるものがあったとしても、それは翻訳活動及びそれに伴う学問に敵対するものではないとする。最も論議を呼ぶのは「異端審問 miḥna」によって伝統主義者と神学派の二極分化が生じたという歴史的事実であろうが、グタスはそこには信仰と理性という二分法が適用されず(なぜなら神学派の側に信仰がないわけではなく、さらに理性という共通項をもって神学と翻訳活動をひとくくりにはできないからである)、この二極分化も一時的な事態にすぎないと主張する。ここで解説を加えておくと、「異端審問」で顕在化した伝統主義者が11世紀に成立する大学 (madrasa) で支配的な地位を得る法学につながり、法学イスラーム (=正統派イスラーム) が主流となったとする説があるが、「異端審問」の頃の伝統主義者と11世紀の大学との直接的な関係は疑問視されている。

この書の核心は間違いなく「翻訳は初期アッバース朝社会が創造したものである」という点にある。すでに述べたように受容する文化の側の能動性を指摘する点では Sabra と共通である。Sabra は reception という受動的な語を嫌い、appropriation という能動的な語を提案したが、何らかの加工が加えられたにせよギリシア思想の本質がイスラーム世界に移入されたという視点が残っている。グタスはそうではなく翻訳とはオリジナルな著作と同じくらいに新しいものの創造 (creation) だとし、イスラームの本質主義的理解を排したように本質主義を排するのである。両者の違いは Sabra は科学という比較的翻訳の影響を受けない学問を研究対象とし、グタスは哲学というより変化の大きな学問を研究対象としていることに関係するのかもしれない。いずれにせよ「初期アッバース朝社会の創造」を主張するグタスは、9世紀ビザンツ帝国における人文主義、さらにはラテン中世の12世紀ルネサンスなどの原型をそこ

に見ている。10世紀のブワイフ朝期が一般にルネサンスとされてきたが、グタスはそれよりも2世紀近く早い時期をルネサンスと呼んでいるのである。

以上の概略以外にもこの書には貴重な示唆が数多く含まれているが、紙幅の都合で割愛せざるをえなかった。この書はデータを積み重ねて結論に至るという手続きを経た研究ではなく、問題提起を重視した著作である。この点にはグタスも意識的であり、巻末に翻訳活動に関わる各学問分野の基本文献表が付されており、よりミクロな視点からの検証に我々を誘う。グタスの指示に従った研究と共に、イスラームとは一体何であったかの再検討も我々の課題となろう。

W.Vanhamel (ed.) :

HENRY OF GHENT

Proceedings of The International Colloquium

on The Occasion of The 700th Anniversary of His Death (1293),

Leuven University Press, 1996, pp.IX+457

加藤雅人

本書は、ガンのヘンリクス の 没後 700 年 を 記念 して、カトリック・レーヴェン大学の哲学研究所内ド・ウルフ=マンションセンターにおいて開催された国際コロキウムの報告を元にした論文集である。編者によれば、このコロキウムには二つの目的があった。すなわち、「第一に、ヘンリクス の 教説 および 彼の 著作 の 批判 校訂 版 に関する さまざま 研究 領域 の 問題 の 現状 (status quaestionis) を 確認 し、第二に、専門家 たちが 特定 の 問題 について の 様々な 意見 や 考察 を 交換 する ため の 場 を 提供 することである。この論文集の出版によって、われわれの現在の知識が評価され、さらなる研究への可能性が開示される」(p. IX)。したがって、この趣旨にそくして、以下に若干の書評を試みることにする。すなわち、文献学的・伝記的研究、認識論に関する研究、形而上学に関する研究に分けて、いくつかの論文を取りあげてヘンリクス研究の現状を紹介しつつ、「さらなる研究への可能性」の一つとして「関係」(respectus) という視点から、残された課題について言及したい。